



人を知り、社会を知る。

プロジェクトインキュベーション機構長、浅見徹教授インタビュー
リーディングフォーラム 2013

JUAS FUTURE ASPECT 2014「CIO 百人委員会」報告
鈴木健氏「なめらかな社会とその敵」セミナー開催
起業体験談「Leopard」連載第4回



人を知り、社会を知る。

浅見徹教授 インタビュー (プロジェクトインキュベーション機構長)

プロジェクトインキュベーション機構の役割は GCL コース生と社会とのパイプを構築することです。学生が入手できる企業情報は限られていますので、学生と企業などが連携してソーシャルイノベーションプロジェクトを進められるようなマッチメイキングをひとつの大きなミッションとしています。

そのために出会いの場とし Global Design Tech Talk と称して、数多くのセミナーを開催しています。セミナーに参加することの意義は、大きく二つあります。一つは、今まであまり関心のなかったテーマであっても、その問題や、今後の展望などについて、簡単に幅広い知識を得られることです。そのとき関心が無かったテーマであっても、将来必ずどこかで学んだ知識が役立つはずです。もう一つ大切なのは、講演者とながりを持つことで、新しいコラボレーションが生まれることです。つながりを作るには、講演が終わったあとに講演者の方に個人的に質問に行き、連絡先を交換する、といったことが必要です。来年度からは、年間スケジュールをたてた上でテーマを設け、セミナーを開催していく予定なので、GCL のコース生には、ぜひ積極的にセミナーに参加することを期待しています。

また、インターンシップに参加し、業界の前線で何が起きているのかを知ることも重要です。長期間、実際の業務に携わることで、どのように仕事が進むのか、その企業やプロジェクトで鍵となる人物が誰なのか、が分かってきます。各学生のテーマに沿ってインターン先を決める GCL では、インターンシップ先を見つけるにあたり、苦労することも多いと思います。個人で受け入れをお願いしても断られることも多いでしょうし、ビザや保険など細かな手続きがたくさんあります。こういったことを経験してもらうために、あえてルールを用意していないので、ぜひたくさん失敗して、それを乗り越えてほしいと思います。

GCL コース生には、5 年後、さらにその先を見据えて、こういったセミナー、インターンシップなどで幅広くかつ深い知識を身につけ、人脈を広げてほしいと思います。2020 年には東京オリンピックが開催されます。1964 年に開催されたときには、高速道路や新幹線、衛星テレビ、海底ケーブルなど様々なテクノロジーによって世の中が大きく変わりました。次のオリンピックまでに ICT でどんなことができるか、GCL コース生の活躍に期待しています。

(聞き手：金子和正、須原宜史 撮影：須原宜史)

■リーディングフォーラム2013



全国のリーディング大学院関係者が一同に会した

1/10(金)・11(土)にグランフロント大阪・コングレコンベンションセンターにおいて、博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2013(リーディングフォーラム)が開催されました。

平成23年から開始された博士課程教育リーディングプログラム(リーディング大学院)は、優秀な学生を広くグローバルに活躍するリーダーへと導くプログラムとして、これまでに合計9分野、30大学、62プログラムが採択されています。

リーディングフォーラムは、全国のリーディング大学院関係者の交流の場として毎年開催されるもので、今回は二度目の開催となります。当日は750人以上のプログラム関係者・教職員・学生が一同に会し、各プログラム担当の教職員同士のワークショップを始め、ポスターセッション、学生によるコンペティションなどが行われました。GCLからは國吉教授、浅見教授を始めとする10名を超える教職員および学生が参加し、終始活発な議論・意見交換が行われました。

◆世界で活躍するリーダーを育てるためのプログラム
安西祐一郎リーディングプログラム委員長は、ご自身の講演の中で、今後の最重要課題として①学生のキャリア形成、②拡大・浸透を図ること、③持続的な仕組みを作ることの3つを挙げられました。

更に、「本プログラムは博士号をハイレベルで取得するだけでなく、世界で活躍するリーダーを育てるプログラムである。このプログラムの成功のためには、最初に博士号を取得し社会にでるプログラム修了生がどのような進路に進むかが非常に重要であり、従来のキャリアに対する意識を変えていく必要がある。そのためには、全博士課程学生の5%しかプログラムに関わらない現状では不十分であり、リーディングプログラムの意義を、プログラム関係者以外の大学関係者にも拡大・浸透させ、持続的に持続する仕組みを作る必要がある」と力強く述べられました。

◆ネクストビジョナリー報告

学生向けのフォーラム「ネクストビジョナリー」においては、各プログラムの学生によるアイデアコンペティションが行われました。現状ある社会的課題に対して、いかに先進的・独創的な解決策とビジョンを提案できるかを競うこのコンペティションに各リーディングプログラムから62の学生チームが参加しました。GCLからは近藤大嗣さん、小林尚生さん、田中義丸さん、笹渕一宏さん、岩尾俊兵さんによるチーム「Create IT up!」が「Japan and/or Global, Now and Future」のテーマで出場しましたが、テーマ別優勝決定戦において惜しくも優勝を逃す結果となりました。優勝できなかったことは残念でしたが、チームメンバーからは早くも来年度に向けての意気込みが語られました。



チーム「Create IT up!」による発表の様子(撮影・須原宜史)



■JUAS FUTURE ASPECT 2014 CIO 百人委員会 報告

1/28(火)目黒雅叙園において、日本情報システム・ユーザー協会(JUAS)が主催する、JUAS FUTURE ASPECT 2014が開催されました。JUASは「IT利活用の向上による、日本産業経済の発展への寄与」を目的とし、さまざまな研究会・委員会を開催する協会です。本シンポジウムでは「ワクワクする未来へこれからの社会をデザインしよう～2020年、そしてその先へ～」をテーマに20を超えるセッションが設けられ、情報システムに関わる多くの産官学の関係者が参加しました。

セッションの一つである第4回CIO百人委員会には、GCLから浅見教授、木戸助教、笹渕一宏さん(学際情報学府・M1)が登場しました。CIO百人委員会とは、民間と行政のCIO間の知見の共有、CIOの視点からの社会課題解決に、学術界の知見を交え、産官学の横断的な取り組みを目指すための委員会であり、東京大学、経済産業省、JUASの三者が共催しています。平本健二経済産業省CIO補佐官/内閣府政府CIO補佐官のモデレーターの下、「2020年を展望したこれからの社会とITの方向性」について、企業のCIO、管理職から、将来を担う中堅・若手までを交えた議論がなされました。

2020年には日本の高齢化率は30%に迫り、現在ある多くの職種がコンピュータによって代替され、私たちの生活は今よりも大きく変化していることが予想されます。その中でITが果たすべき役割は非常に大きく、日本として世界最高水準のIT活用社会の実現が必要とされています。

浅見教授からは、2020年に向けた大学の取り組みとして、「これからのIT分野の人材育成には、自分の研究テーマの位置づけを社会の中で客観的に理解しながら深く研究し、それを卒業後に社会で活かせる人材が必要」と述べられ、具体的な取り組みとして、GCLの長期間に渡るインターンシップや、GCLが行っている多くのセミナーについてご紹介されました。

笹渕さんからは2020年までに取り組むべき課題として、IT教育を挙げられ「同期の学生と話していても、まだまだ非情報系の学生の中にはITの基礎知識においてギャップを感じる人が多い。今では教養としての英語はかなり浸透しているので、同様にIT教育も小学校の頃からプログラミングのような深いレベルの教育を加えてはどうか」と提案がなされました。



2020年のITと社会の在り方について話す笹渕さん(撮影・須原宜史)

■鈴木健氏 「なめらかな社会とその敵」 セミナー開催



6時間に渡り、活発な議論が行われた（撮影・須原宜史）

2月1日（土）、工学部2号館電気系会議室にて、鈴木健氏を講師にお招きした「なめらかな社会とその敵」セミナーを、GCLと東大セルフ・インベストメントの共催にて開催しました。鈴木氏は株式会社サルガッソー代表取締役社長・東京大学特任研究員を務めていらっしゃり、2008年に総合文化研究科博士課程を修了されています。2013年に発刊された著書「なめらかな社会とその敵（勁草書房,2013）」において、そのユニークな貨幣システム「PICSY」や、分人民主主義「Divicracy」などの思想を展開し、大きな反響を呼んでいます。

今回はGCLコース生による企画の下、専門的な議論も含めじっくり理解を深めることを目的とした6時間に及ぶセミナーを行いました。

5部に分けられた講演は、5章構成の「なめらかな社会とその敵」を1章ずつ解説するような形で進められ、本学在校生、教職員、OB・OGなど合計40人ほど集まった参加者は皆、長時間の講演にも関わらず質疑応答を交えながら熱心に聞き入りました。中でも、多くの時間を割いて解説され、そしてそれに応えるように白熱した議論が展開されたのは、鈴木氏が博士課程において研究されていた価値伝搬貨幣「PICSY」の部でした。

「PICSY」とは現在の貨幣の不合理的を、価値が伝播する貨幣を導入することで解決しようとする貨幣システムです。例えば医療においては、患者の治療を遅くする<悪い>心持ちの医者の方が、患者をより早く健康にしようとする<良い>心持ちの医者より、診察料から得られる収入が結果的に多くなる不合理があります。これを「PICSY」では医師が治療した後、その患

者が元気になって、社会復帰し、バリバリ働けるようになれば、その収入に応じて医者の収入も変動する（伝播する）ようにします。

「PICSY」をICT技術により実現するためのアルゴリズム、そして実社会に適応するための実践的な手段が本書には細かく書かれており、会場では図や例を交えながらその解説が行われました。参加者の背景が多様であったため、質疑応答の内容も、数学、政治学といった学術的観点や、経営者、プログラマー、そして若者の視点など、多様に展開され盛り上がりました。他にも各章に登場する発明や思想に至るまでの過程や、裏話などに知的興奮をかきたてられ、6時間にわたる長丁場にも関わらず参加者からのアンケートでは大変満足度の高い評価を頂きました。

本書の特筆すべき特徴として、理系/文系、産業界/学術界の壁のない、多様で学際的なアプローチから議論が展開される点があげられますが、その影響もあってか、参加者の背景も多様で、講演はさながら未来の社会を作るための会議のようになりました。

「300年後の未来」を想定している本書ですが、例えそのような社会を実際に体験できないとしても、皆でより良い社会にしていくための仕組みを議論するというのは、刺激的で喚起力のある体験です。このような会を行い、参加して議論を交わせたことの価値は、今後どんな形で伝播し、人々に利益をもたらして行くのでしょうか。「PICSY」の「価値の伝播性」という概念を用いて想像するのもまた面白いかもしれません。

（本文執筆・施井泰平さん 学際情報学府 M1）



「クラウド型医療総合情報システム」の構築へ（撮影・森友亮）

◆日本を医療の最先進国に

ようやく会社としての体をなしてきた Leopard 株式会社だったが、肝心の事業の方はというと、競合が出てきたといった事情が重なって、二転三転していた。この時期はメンバーのモチベーション管理が非常に難しい。何をやっても、どの分野でも、競合がいるし、自分のサービスが本当に意義あるものかの保証なんてどこにもないからだ。どこかの科学者が起業家の脳波を調べたことがあるそうで、それによると、起業直後から一年は「月曜日に運命の人に会い、火曜日に愛し合って、水曜日に電撃結婚し、木曜日に彼女の浮気が発覚、金曜日に離婚を決意し、土曜日に離婚届を出した帰り道で100万ドルを拾う」くらいのアドレナリンの出方をするそうだ。確かに、この時期はメンバー間でもかなりの気分の浮き沈みがあった。

そこでもう一度原点に帰って「何が社会を変えるのか」「何の技術ならば僕たちの強みにできるのか」を考えてみた。その結果、データ解析技術が Leopard の強みであり、メンバーの興味が医療分野であることが分かった。そこで、Leopard は「日本を医療の最先進国にする」というビジョンを先に作り、そのためには何をしなければいけないか考えた。

その結果、日本の医療現場では「地域ごとに医療の質に格差がある」「セカンドオピニオンをなかなかえられない」「医療事務にコストがかかってクリニックが医療機器に投資できない」という問題があることが分かった。そこで、これらを一挙に解決する手段として「クラウド型医療総合情報システム」の構築に取り掛かったのである。

クラウド型医療総合情報システムとは医療事務に必要な「患者様の予約・待ち行列管理」「電子カルテ」「電子レセプト」の三つを統合したサービスである。患者様が病院のサイトで予約ボタンを押すと、あらかじめ簡単な問診票への記入と希望の時間を指定でき、同時に病院側では待ち行列問題を解きながら電子カルテの大まかな記入が自動で完了する。患者様が来院し、医師がカルテを記入すると、クラウドサーバがこれまでの診断結果（登録している全医師分）を解析し、診断をレコメンドする。もちろん最終的にはレコメンドを見ながら医師が自分でカルテの記入を行う。医師はビッグデータからセカンドオピニオンを得られるのである。そうしてカルテの記入が終わって「完了」ボタンを押すと即座に保険点数の計算が終わる……。

以上を全て AWS のクラウドサーバで行い、ネットにさえつなげばクリニックは明日からサービスを利用できる。地方での政界、建設業、病院の癒着・腐敗を糾弾した結果全てを失ってしまった私の父の敵をうてるサービスである。私の胸は高鳴った。しかもセキュリティのリスクを恐れて大手はしばらく参入してこない。これこそ経営学的にも最良のビジネスであった。

とはいえチーフエンジニアをはじめとして「リスクをどうマネジメントするんだ」という声が上がった。またイノベーションゆえにすでに起業して成功している既存の経営者からも反応は良くなかった。「もっとワリのいいビジネスがあるだろう」というのだ。しかし、私はここにかかるしか日本をよくする手段はないと思った。幸い技術的にはできないものでもない。医師会や病院事務長会内でも強力なサポーターがついた。ようやく何かが動き出そうとしているのだ。

そんな中この電子カルテ事業は「代表取締役技術担当パートナー」の辞任で幕を閉じることになる。私の中でこの事業はまだ終わってはいない、まだ始まってもないが、まずは Leopard は別の道を模索することになるのであった……。

（本文執筆・岩尾俊兵さん（経済学研究科 M1、Leopard 代表取締役パートナー））



■ イベント告知

◆ 学生有志による GCL 活動報告会

来年度より GCL プログラムの履修を考えている方を対象に、今現在コースに所属している学生による GCL の活動報告会を開催します。カリキュラムや学生のサポート体制などについて、学生目線から GCL の魅力を余すことなくお伝えします。内部の学生の生の声を聴ける絶好の機会ですので、少しでも興味のある方は是非お気軽にご参加ください。

日時：2月22日（土）14:00～15:30

場所：工学部2号館241教室（予定）

事前予約：不要

◆ LINE Exective ランチタイム

ビジネスの現場で働く社員の方と学生が交流する Exective ランチタイムの第一回は LINE 株式会社です。

今やユーザー数3億人を突破したアプリ「LINE」がどのように生まれ、今後どのように成長するかについて、企画担当の社員さんから気軽に話を聞ける機会です。是非ふるってご参加ください。

日程：2014年2月13日（木）、17日（月）

時間：両日程とも13:00～14:30

場所：渋谷ヒカリエ LINE オフィス

参加費：無料

対象：東大の学部生、GCL プログラム生

応募方法（※現在、募集は17日のみとなります）

2月14日までに、①所属 ②学年 ③氏名を記載の上、GCL 広報企画（pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp）までご応募ください。

● 2014/02/13 (R2P) Global Design Brown Bag Seminar: Google Tech Talks

Google における自然言語処理技術 R&D

日時：2月13日（木）16:40～18:10

場所：工学部3号館1F 電気系セミナー室2・3

講演者：賀沢 秀人 グーグル株式会社 エンジニア
(<http://www.tedxtokyo.com/talk/kazawa/>)

問い合わせ先：

GCL プロジェクトインキュベーション機構
(gcl_pim@adm.i.u-tokyo.ac.jp)

● 2014/02/13 Global Design Seminar :

日本半導体産業に必要な水平分業

日時：2月13日（木）19:00～21:00（開場18:30）

講師：大山 聡氏（IHS グローバル株式会社
Technology 部門 主席アナリスト）

場所：東大ものづくり経営研究センター5F

連絡先：コンピュータ産業研究会
(akeyama@mmrc.e.u-tokyo.ac.jp)

主催：コンピュータ産業研究会

<http://merc.e.u-tokyo.ac.jp/shintaku/comken/index.html>

● 2014/02/27 (R2P) Global Design Lecture : ビッグデータを活用した社会・経済の実証分析

日時：2月27日（木）14:50～16:20

場所：東京大学工学部2号館3F 電気系会議室1AB

講演者：大西 立顕 ohnishi.takaaki@i.u-tokyo.ac.jp

（東京大学大学院情報理工学系研究科 ソーシャル ICT 研究センター 准教授 / 数理情報学専攻（兼任））

問い合わせ先：

GCL プロジェクトインキュベーション機構
(gcl_pim@adm.i.u-tokyo.ac.jp)

● 2014/02/27 (R2P) Global Design Leading Reseacher Cafe

日時：2月27日（木）16:30～18:30

場所：工学部2号館3F 電気系会議室1AB

講演者：

安藤 翔伍（学際情報学府）

上月 豊隆（知能機械情報学専攻）

企業から若手1名：KDDI 研究所 人選中

問い合わせ先：

GCL プロジェクトインキュベーション機構
(gcl_pim@adm.i.u-tokyo.ac.jp)

GCL Newsletter の Web 公開を開始しました！

最新号はもちろん、これまでのバックナンバーもご用意しています。見逃した方も是非ご覧ください。

<http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/gclnewsletter/>

編集・発行：

情報理工学系研究科・GCL 広報企画

（森友亮（情報理工 M2）、後藤昂彦（情報理工 M1）、金子和正（工 B3）、須原宜史（工学系 D2）、伊藤優（情報理工 M1））

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学工学部8号館621号室 GCL 事務局

E-mail：pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp